

## 「キレル」心性とトラウマ的体験との関連

牧 田 浩 一

(キーワード: 「キレル」心性, トラウマ的体験, 中学生)

### 問題と目的

中学生が「キレル」ということが教育問題として取りざたされたのは、1998年の栃木県黒磯市の中学校で起きた教師刺殺事件である。その事件後も、「キレル」中学生による事件があいついで話題となっている。

「キレル」現象に関して多様な研究がなされているが、その定義は様々ではない。「キレル」現象に関する研究として、深谷 (1998)、尾木 (1998)、老松 (1999)、東京都編『キレル』(1999)、齊藤 (1999)、長谷川 (2000)、下坂ら (2000)、富岡 (2002) などがある。

「キレル」現象には、注意欠陥多動性障害や行為障害、解離性障害などの精神疾患などが、重層的に存在しているといわれている (鑑, 2001)。そのため、その対処には、薬理学、神経心理学、発達心理学などの多方面からのアプローチが必要であると同時に、それらが統合された見解が求められている。

老松 (1999) は普段は目立たないのに突然「キレル」現象で表される激しい怒りは、「見捨てられ」と密接なつながりがあり、破壊性を持っているが、それは誇大になってしまったものを原点に戻す力があるという。つまり、激しい怒りによってここにいてよいという安心感をもたらすという。長谷川 (2000) は、「キレル」現象には「記憶の忘却やそれにかかわり解離性に似た症状がみられること」があると指摘している。

東京都編の「キレル」(1999) では、「(「キレル」とは) 何かのきっかけで、頭の中が真っ白になり、前後の出来事を覚えていない」状態とされている。「キレル」状態では、何らかの意識障害が発生している可能性があることも示唆されている。

牧田ら (2002) は「キレル」現象とは、「むかついて我慢できなくなったときに激しく怒る」などのような苦痛な感情によって、周囲のものが予想しにくい状況で突発的、衝動的に怒りが表出される現象であるとした。

「キレた」子どもの性格分類の結果、欲求不満耐性が欠けている傾向にあるとする研究が多数みられる (町沢, 1998; 榊原, 2000)。

「キレル」子どもの成育歴に関する研究では、親に関

して父親の存在感のなさ、親の人格的な問題や暴力があり、子どもに関して普通の人間関係を作ることが不得手で友人がいないなどが挙げられている (富岡, 2002)。そして、子どもが「キレル」直接の引き金は、一見些細な出来事かもしれないが、それに至るまでの成育歴が大きく関係しているという。

中学生は、学校教師やスクールカウンセラーに自分の心境や心情を説明する際、「むかつく」「キレル」という言葉をよく用いる。これまでの牧田らの研究 (2000, 2002) では、そうした中学生の「キレル」現象を、「むかつき」の連続線上にあるものとして捉えている。尾木 (1998)、鑑 (2001) も同様の指摘をしている。

これまでの「キレル」心性の因子に関して、崔 (1998)、下坂ら (2000) の研究がある。崔 (1998) は、高等学校の生徒の衝動に焦点を当て、「敵意」、「いらだち」、「状態不安」との相関を調べ、高い信頼性が確認されている。下坂ら (2000) は、中学校の生徒の「キレル」行動に焦点を当て、「間接的攻撃」「直接的攻撃」「パニック状態」「反社会的行動」の因子を明らかにしている。

鑑 (2001) は中学生の「キレル」現象には、注意欠陥多動性障害、行為障害や解離性障害などの精神疾患など様々な要因が存在していると述べている。今回筆者は、鑑 (2001) の言う多様な要因をもとに、筆者が「キレル」中学生の SCT (文章完成法テスト)、教育相談などの実践経験から得た知見を加味した因子構造を見出したいと考えた。

本研究の仮説として、「キレル」心性は、①攻撃性との関連があり、②学校への不満や学業の不振、不安があること。「キレ」たときの心理状態として、③記憶の忘却やそれにかかわり解離性に似た症状がみられること、④生育歴にトラウマエピソードが存在すること。また、⑤対人関係に葛藤をもっており自暴自棄になりやすいこと。⑥パーソナリティに自己愛的傾向があることを仮説とした。

### 対象と方法

1. 調査対象: A 中学校1年生 (男子48名, 女子48

名), 2 年生 (男子55名, 女子57名), 3 年生 (男子61名, 女子61名), B 中学校 1 年生 (男子10名, 女子13名), 2 年生 (男子 7 名, 女子 8 名), 3 年生 (男子13名, 女子20名) の計401名。明らかな作為回答のある質問紙, 未回答項目のあった質問紙を除いた。

**2. 質問紙の構成:** 安藤ら (1999) の日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ), 田辺・小川 (1992) の DES (Dissociation Experience Scale), 佐方 (1986) の自己愛人格目録 (NPI), 松山・倉智 (1969, 1984) の SMT (学校適応診断検査), 阿部・高石 (1985) の日本版 MMPI 顕在性不安検査 (MAS), これらの項目に, 筆者の作成した10項目を追加し, 質問紙を構成した。さらに, トラウマ的体験に関する質問項目 (6 項目) を加えた。

**3. 実施手続き:** 調査に際して回答者, 学校関係者の了解を得て, 各学校のホームルームの時間に学級担任の監督のもとで実施された (2001年 2 月~同年 7 月)。

## 結 果

### 1. 「キレル」心性に関する質問項目の因子分析

尺度57設問のうち天井ーフロア効果を確認したところ14設問が条件を満たさなかったため削除した。また, 各得点 (ただし, 逆転項目は逆に得点化) を合計し, 合計点の下位25%と上位25%の群に分け, G-P 分析 (分散分析) を行った。その結果有意差のなかった5 設問を削除した。それらの項目を除いた38設問について主成分分析とバリマックス回転による因子分析を行なった。因子負荷量.04以上を項目選択の基準とした結果4 因子が抽出された (表 1)。第1 因子は「激情的反応」(9 項目), 第2 因子は「被害的反応」(7 項目), 第3 因子は「自己愛的反応」(4 項目), 第4 因子は「葛藤回避反応」(4 項目) と因子名を命名した。これら4 因子を「キレル」心性の下位尺度とした。その後, 成分ごとに因子得点を新たに算出した。

### 2. 学年差と男女差

学年における各因子得点の平均と SD ならびに分散分析の結果を表 2 に示した。その結果, 学年による有意な

表 1 「キレル」心性の項目の因子分析結果 (バリマックス回転後)

項 目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	共通性
1. 私は, むかつくとモノに当たりたくなる。	.726	.145	.066	.046	.542
2. いらいらするとモノにあたってしまう。	.705	.136	-.005	.103	.554
3. 私は, 「キレル」ことがある。	.701	.044	-.036	.216	.443
4. 私は, 友だちにキレたことがある。	.641	-.033	.047	.169	.438
5. 私は, 逆ギレしたことがある。	.607	.051	.122	.229	.358
6. ばかにされると, すぐに頭に血がのぼる。	.586	.238	.116	.107	.315
7. かっとなることをおさえるのがむずかしいときがある。	.582	.253	.143	-.040	.300
8. 私は, 怒るとなんでもやっしまいそうな気がする。	.533	.243	.120	-.003	.396
9. 私は, いらいらすることが多い。	.454	.348	-.062	.255	.527
10. 私を嫌っている人は結構いると思う。	.127	.729	.167	-.023	.341
11. かげで人から笑われているように思うことがある。	.262	.686	.102	-.102	.513
12. 自分は役に立たない人間だと思うことが, ときどきあります。	.072	.669	-.250	.111	.504
13. 友だちの中には, 私のことをかげであれこれ言っている人いるかもしれない。	.239	.626	.157	.015	.424
14. 私はたしかに自信がありません。	-.040	.547	-.262	.265	.560
15. 顔が赤くなるんじゃないかと, よく気にするほうです。	.071	.479	-.071	.088	.425
16. 私は, 自分がどうなってもいいと思うことがある。	.229	.453	.009	.240	.605
17. 友だちの意見に賛成できないときには, はっきりいう。	-.046	.072	.772	-.033	.576
18. 自分の権利は遠慮しないで主張する。	.081	-.036	.730	.090	.548
19. だれかにふゆかいなことをされたら, ふゆかいだとはっきりいう。	.082	-.022	.695	.118	.474
20. 私は, 個性の強い人間である。	.200	-.054	.587	.082	.394
21. テストは嫌いである。	-.033	.031	.025	.715	.434
22. 授業を抜け出したいと思うことがある。	.206	.236	.083	.574	.440
23. ほしいと思ったものは, 絶対手に入れたと思う。	.210	.032	.065	.540	.528
24. 私は, 私の大事なものをこわされたら, 相手の大事なモノも, こわしてやりたいと思う。	.189	.059	.089	.503	.247
寄与率 (%)	16.045	12.469	9.374	7.466	45.354
α 係数	.832	.735	.692	.518	

差は認められなかった。

性別における各因子得点の平均とSDならびに分散分析の結果を表3に示した。その結果、「被害的反応」,「葛藤回避的反応」については男女の間に有意な差が認められ、「被害的反応」「葛藤回避的反応」ともに男子より女子の方が高かった。

「被害的反応」については男女の間に有意な差が認められ、「被害的反応」「葛藤回避的反応」ともに男子より女子の方が高かった。

表2 学年における各因子得点の平均と分散分析の結果

因子名	1年生 n=119		2年生 n=127		3年生 n=155		計 n=401		分散分析の結果			
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F値	df	p値	判定
「激情的反応」	.11	1.01	-.14	1.01	.03	.98	.00	1.00	2.00	2	.14	n.s.
「被害的反応」	.06	1.00	.03	.99	-.08	1.01	.00	1.00	.77	2	.47	n.s.
「自己愛的反応」	-.03	1.00	.00	1.01	.03	1.00	.00	1.00	.12	2	.89	n.s.
「葛藤回避的反応」	-.04	1.11	-.11	.99	.12	.91	.00	1.00	2.05	2	.13	n.s.

(n.s. not significant)

表3 性別における各因子得点の平均と分散分析の結果

因 子 名	男子生徒 n=194		女子生徒 n=207		計 n=401		分散分析の結果			
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F 値	df	p 値	判定
「激情的反応」	.08	.99	-.08	1.01	.00	1.00	2.70	1	.10	n.s.
「被害の反応」	-.29	.98	.28	.94	.00	1.00	35.23	1	.00	* *
「自己愛的反応」	-.06	.97	.06	1.03	.00	1.00	1.53	1	.22	n.s.
「葛藤回避の反応」	-.11	1.02	.10	.98	.00	1.00	4.34	1	.04	*

(\*\*p<.01, \*p<.05, n.s. not significant)

### 3. 「キレル」心性とトラウマ的経験との関連

トラウマ的経験（6項目の合計）と4つの因子との関連について表4に示した。トラウマ的経験と「激情的反応」は弱いながら有意な正の相関、「被害的反応」は比較的強い有意な正の相関、「葛藤回避反応」は非常に弱いながら正の相関がみられた。

表4 各因子得点とトラウマ的経験との相関

因子名	トラウマ的経験	判定
「激情的反応」	.217	**
「被害的反応」	.456	**
「自己愛的反応」	-.013	n.s.
「葛藤回避的反応」	.153	**

(\*\*p<.01, n.s. not significant)

## 考 察

本研究の目的は、教育相談などの実践経験から得られた知見を加味した「キレル」中学生の心理的因子を見出すことであった。はじめに立てた仮説としては、①攻撃性、②学校不適応、③解離性、④不安耐性、⑤対人関係の葛藤、⑥自己愛的傾向であったが、結果、本研究において作成した「キレル」心性の因子構造は、「激情的反応」「被害的反応」「自己愛的反応」「葛藤回避反応」の4因子であった。因子分析の結果、崔（1998）のもの

とは異なった構造となった。このように異なった因子構造となったのは、本研究では多様な心性が複合していると仮説を立てたのに対し、崔（1998）は「敵意的攻撃性」や「状態不安」と限定したためであるものと思われる。また本研究が中学生を対象としていたのに対し、崔（1998）は高等学校の生徒を対象にしていたため年齢差が結果の相違に関係しているのかもしれない。今後、多様な年齢層を加味した調査を行っていく必要があると思われる。

また、下坂ら（2000）が、「キレル」心性の尺度に関し、「間接的攻撃」「直接的攻撃」「パニック状態」「反社会的行動」の4因子構造を見いだしている。下坂ら（2000）によると、「相手をにらみつけた」や「物にやつあたりした」などから①「間接的攻撃」と因子名を命名し、「相手をけた」「人をなぐった」などから②「直接的攻撃」、「パニック状態になった」「泣きわめいた」などから③「パニック状態」、「持っていたナイフを取り出そうとした」「相手をおどしてお金や物をとった」などから④「反社会的行動」としている。下坂ら（2000）の見いだした因子が、「目立ちやすい」行動的側面を強調しているのに対し、本研究は「被害的反応」「葛藤回避反応」のような「目立たない」行動、つまり行動として表出する以前の心理的側面が強調された。

各因子の性差について、「被害的反応」、「葛藤回避的反応」は男女の間に有意な差が認められ、両者とも男子

より女子の方が高かった。今回の結果から、女子には「被害的反応」「葛藤回避的反応」のような行動化されない反応を示すものが男子よりも多いことが言える。しかし、「キレル」中学生が男子に多いことを指摘している研究（富岡，2002）がある一方、「キレ」を行動化するのは、男子よりも女子の方が多（牧田，2000；長櫓，2005）とする研究もあり、今回の結果が、「キレ」やすさに性差があるとは断言できない。

トラウマ的経験と4つの因子との相関について調べたところ、トラウマ的経験と「激情的反応」は弱いながら有意な正の相関、「被害的反応」は比較的強い有意な正の相関、「葛藤回避反応」は非常に弱いながら正の相関がみられた。このことから「キレル」生徒において、「激情的反応」「被害的反応」「葛藤回避反応」を示す生徒に関しては、トラウマ的経験の影響の大きさが考えられた。富岡（2002）は、「キレル」子どもの生育歴には、暴力などを伴ったしつけを受けてきたことが多いと指摘している。このことは本研究の結果と符号しているものと思われる。しかし、トラウマ的経験の項目については、項目数が少ないこともありこれ以上の言及については、今後の検討課題としたい。

## まとめ

本研究では、中学生などに見られる「キレル」現象を「むかついて我慢できなくなったときに激しく怒る」などのような苦痛な感情によって、周囲のものが予想しにくい状況で突発的、衝動的に怒りが表出される現象であると定義し、中学生が「キレ」たときの反応様式とトラウマ的体験との関連を調べた。

因子分析を行った結果、中学生が「キレ」たときの反応様式として①「激情的反応」、②「被害的反応」、③「自己愛的反応」、④「葛藤回避反応」という4つの因子構造が明らかになった。

男女差について「被害的反応」「葛藤回避反応」がともに男子よりも女子に多く見られた。

また、「キレル」心性とトラウマ的経験の有無との相関を調べた結果、「激情的反応」「被害的反応」「葛藤回避反応」を示す生徒に関して、トラウマ的体験と「キレル」心性との関連が示唆された。

<付記>本小論の一部は、日本犯罪心理学会第39回大会（2001年9月2日、高梁）で発表した。ご指導頂いた田中雄三先生に記して感謝申し上げます。

## 文 献

阿部満州・高石昇 日本版 MMPI 顕在性不安検査使用

手引，三京房，1985.

安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性，信頼性，心理学研究，70 (5)，1999，384-392.

深谷昌志 モノグラフ・中学生の世界 61 キレル・ムカつく，ベネッセ教育研究所，1998.

長谷川博一 子どもたちの「かすれた声」，日本評論社，1998.

葛西真記子 Kohut 理論の “Grandiosity” の日本での有効性—集団依存的誇大感と集団認識的誇大感尺度の作成—，カウンセリング研究，32 (2)，1999，134-144.

榊原洋一 「多動性障害」児 「落ち着きのない子」は病気か？，講談社 α 新書，2000. 町沢静夫 遊びの喪失，嫉の欠如，苛酷な受験体制がキレやすい子どもを生んでいる，特集「キレル時代」の医療福祉，日本医療企画編：ばんぼう，205，1998，28-29.

牧田浩一・阪武彦・田中雄三 中学生の「むかつき」「キレル」現象に関する意識調査，九州神経精神医学，46 (3～4)，2000，189-195.

牧田浩一・阪武彦・田中雄三 「むかつき」「キレル」現象と攻撃性との関連性及び SCT (文章完成法テスト) の特徴，九州神経精神医学，48 (1)，2002，15-27.

松山安雄・倉智佐一 学級におけるスクール・モラルに関する研究(第1報)，大阪教育大学紀要，18，1969，19-35.

松山安雄・倉智佐一・学校モラル研究会編 小学生用 SMT 手引，日本文化科学社，1984.

長櫓涼子 「キレル」現象の実態について—その理論と教育現場の現状に関する一考察—，鳴門教育大学学校教育学会学会誌，20，2005，3-8.

尾木直樹 新しい「荒れ」と「キレル」子—自己肯定心情欠乏症，犯罪心理研究，5，1998，21-28.

老松克博 スサノオ神話でよむ日本人 臨床神話学のころみ，講談社新書メチエ，1999.

田辺肇・小川俊樹 質問紙法による解離性体験の測定—大学生を対象にした DES (Dissociation Experience Scale) の検討—，筑波大学心理学研究，14，1992，171-178.

齊藤孝 子どもたちはなぜキレルのか，ちくま新書211，筑摩書房，1999.

佐方哲彦 自己愛人格の心理測定—自己愛人格目録 (NPI) の開発，和歌山県立医科大学進学課程紀要，16，1986，118-127.

崔京姫 キレ衝動尺度作成の試み，筑波大学発達臨床心理学研究，第9・10巻，1998，55-58.

下坂剛・西田裕紀子・齊藤誠一・伊藤崇達・神藤貴昭・柳原利佳子・鶴田弘子・久木山健一・西田紀子・西村亜希子・榎本千春・坂本由佳・前川雅子 現代青少年の「キレル」ということに関する心理学的研究(1)―キレル行動尺度作成およびSCTによる記述の分析―、神戸大学発達科学部研究紀要, 7(2), 2000, 1-8.  
鑑幹八郎 いわゆる「キレル行動」について：児童期・思春期の破壊的・攻撃的行動に関する考察, 臨床心理

研究―京都文教大学心理臨床センター紀要― 3号, 2001, 1-8.  
東京都編 キレル―親, 教師, 研究者, そして子どもたちの報告―, ブレーン出版, 1999, 11-21.  
富岡賢治 「突発性攻撃行動および衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究―「キレル」子どもの成育歴に関する研究―, 国立教育政策研究所内発達過程研究会, 2002.

#### 質問項目 (抄)

(「当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「ほとんど当てはまらない」「当てはまらない」の5件法)

1. なぐられたら, なぐり返すと思う。
2. だれかにふゆかいなことをされたら, ふゆかいだとはっきりいう。
3. 私は, 私の大事なものをこわされたら, 相手の大事なモノもこわしてやりたいと思う。
4. 相手が先に手を出したとしても, やり返さない。
5. かっとなることをおさえるのが, むずかしいときがある。
6. 私は, 自分がどうなってもいいと思うことがある。
7. 私は, 一つのことに夢中になりやすい。
8. 私は, 一人でいることが多い。
9. 苦しいときも, 苦しいと感じないでいることができる。
10. うそをついていないはずなのに, うそをついたと責められることがある。
11. 自分は役に立たない人間だと思うことが, ときどきあります。
12. じっとすわってられないくらい, 気持ちが落ちつかないことがあります。
13. かげで人から笑われているように思うことがある。
14. 私を嫌っている人は結構いると思う。
15. 私は, 人ときょうそうして, 相手を負かしたい。
16. 私は, 友だちのほしがるようなものがほしい。
17. 顔が赤くなるんじゃないかと, よく気にするほうです。
18. テストはむずかしくてやる気が出ない。
19. 授業を抜け出したいと思うことがある。
20. 私が困っていたり悩んでいたら, 先生は一緒になって考えてくれる。

(以下, 「はい」「?」「いいえ」の3件法)

1. 私は, 病院などに入院したことがある。
2. 私は, むりやりいやなことをさせられたことがある。
3. 私は, いじめられたことがある。
4. 私は以前に, ひどくつらい思いをしたことがある。
5. 先生とうまくいっているほうだと思う。
6. 家では, 親とうまくいっているほうだと思う。

# Relationship between ‘KIRERU phenomena’ and Traumatized episode

Koichi MAKITA

The purpose of this study is to clear that the Traumatized Episode can cause the ‘KIRERU phenomena’ of junior high school students. Students Traumatized episode can be an important factor of their ‘KIRERU phenomena’.

I made a psychological survey of ‘KIRERU phenomena’ on 401 junior high school students (194 boys and 207 girls) from February to August 2001. As a result of the survey, I found 4 factors in ‘KIRERU phenomena’. They are ① Uncontrollable Passion ② Persecution complex ③ Strong Narcissism and Self-pity ④ Escape from Conflict. There is no relationship between the 4 factors and students ages. But, Boys do not have so much ② Persecution complex ④ Escape from Conflict as girls do.

I investigated the interrelation between the 4 factors and students’ traumatized episode. As a result of the investigation, I found that ① Uncontrollable Passion ② Persecution complex and ④ Escape from Conflict are closely connected with the traumatized episode.

Based on these results, I attend some consideration.